

令和8年5月

人権一口講座



「たしかな足あと」

大叔母が残した一篇の詩があります。

「まだ歩ける まだ書ける まだ見える

残されている たくさんの ”まだ“

まだ まだ まだ さあ一歩 もう一歩

振り返れば たしかな足あと」

大叔母は昨年十月、九十六歳で亡くなりました。戦争の時代を生き抜き、退職後は、自分の時間を楽しみながら暮らしていました。俳句や絵画、カラオケなど、表現することがとても好きな人でした。晩年は病気のため入院生活が続き、思うようにいかないことも多かったはずですが、私たちとの面会や外出をいつも心待ちにしてくれていました。病室の扉を開けると、変わらず笑顔で迎えてくれた姿が思い出されます。

亡くなった後、家の片付けをしている中で、この詩が見つかりました。人生には、思いどおりにならないこともたくさんあります。それでも大叔母は、「まだできること」を一つひとつ大切にしながら、毎日を積み重ねて生きていたのだと感じました。

誰の人生にも、その人なりの「たしかな足あと」があります。その足あとが尊重され、大切にされる社会であってほしいと、改めて思います。

